

令和元年6月7日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04485

研究課題名(和文) グローバル時代に対応した教員研修プログラムの開発

研究課題名(英文) A study of the development of teacher in-service training in the global times

研究代表者

中山 博夫 (NAKAYAMA, Hiroo)

目白大学・人間学部・教授

研究者番号：80406561

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)： グローバル時代においては、多文化共生教育と地球環境教育とが重要になる。それらの問題に関する教員研修プログラムを開発してきた。

まず、グローバル時代における教員には何が求められるかを探究した。必要とされる資質能力は、グローバルな視野をもって共創型対話を駆使して問題解決する力である。共創型対話を基盤として、多文化共生教育研修プログラム(「マレーシア ペナンからの転校生」)と地球環境教育研修プログラム(「海ごみ」)を開発した。

両プログラムは共創型対話と体験型活動を取り入れて、研修に参加した教員の意識変容を促した。そして研修に参加した教員が授業研究を行い、グローバル時代に向けた授業開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ESDやSDGsは、私たちが明るい未来を追い求める上で最重要課題である。本研究は、ESDとSDGsの一環の流れの中にあるものである。本研究で取り上げた多文化共生は、人類が共に繁栄するためには必要なものである。文化、宗教、慣習の異なりを超えて共存することが、持続可能な社会の基盤となるのである。地球環境問題には、地球温暖化、熱帯林の消滅、オゾン層、海ごみなど多くの問題がある。その中でも、児童にとっても自分の日常生活と結びつけやすい海ごみを選んだ。児童と共に問題解決にあたらうと教員を育てるためである。

本研究は、持続可能な社会に向けてESDやSDGsを社会的に広げていく上で大きな意義を有している。

研究成果の概要(英文)： It is important to carry out multi-cultural education and global environmental education in the global times. So, we have developed teacher in-service training about multi-cultural education and global environmental education.

First, we studied nature and abilities in the global times. They are global outlook and abilities for problem solving. Next, we have developed two teacher in-service training programs. One is "A transfer student from Penang, Malaysia" which is for multi-cultural education. Another one is "Waist in the sea" which is for global environmental education. They are made on inventive dialogue which was contrived by Dr. TADA Takashi. Both programs are based on inventive dialogue and learning by doing. We were aiming to raise the consciousness of teachers who attend the programs. And they gave lessons to their students about multi-cultural problems and global environmental problems.

研究分野：教育学

キーワード： グローバル時代 多文化共生教育 地球環境教育 教員研修 教員の意識変容 授業研究

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 多文化共生教育

法務省登録外国人統計(2015年6月)によれば、総数で2,172,892人の外国人が日本国内で生活していることになっている。昨年の統計よりも約86,000人の増加である。日本人と外国人が混在して生活する中で、さまざまなトラブルも起きている。多文化共生に関する先行研究は多々あるが、教員研修に特化したものは見あたらない。日系ブラジル人の研究者であるリリアン テルミ ハタノは、「4F」の異文化体験プログラムを提案している。「4F」とは、「Fact」「Fear」「Frustration」「Fairness」である。ハタノの提案は過去の事実を認識し、少数者であることへの不安や孤独、挫折感を体験し、公正を築くためにはどうすべきかを考えるというものである。この提案は本研究に大きな示唆を与えた。

#### (2) ESD

永田佳之は「地球温暖化や世界金融危機など、私たちは皮膚感覚で否応なしに持続不可能性を感じる」と述べているが、首肯できる。ESDに関しても実践的な研究が多々ある。だが、教員研修に特化したものはあまりない。

#### (3) 「21世紀型能力」

国立教育政策研究所は、21世紀を生き抜くための能力として「21世紀型能力」を提案した。そして、その能力を「基礎力」「思考力」「実践力」の3層構造で考えている。これらの考え方は、協同して社会づくりに参画する市民的責任を自覚して行動できる日本人を育てるものであり、多文化共生教育・ESDに繋がるものである。本研究では、「21世紀型能力」の検討からもグローバル時代に対応した教員研修プログラムを探究する。

#### (4) マレーシアでの学校教育調査・目白大学人間学部児童教育学科マレーシア臨地研修

これまでにマレーシアでの学校教育調査・目白大学人間学部児童教育学科学生を対象とした臨地研修プログラムを何度か実施してきた。イスラームの文化の中で、多様な価値観への寛容が目指されていることが分かった。独自の宗教・文化の保持と異文化への寛容を目指した教育から学ぶものは大きい。教員研修プログラムの開発のために参考にしたいと考える。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、グローバル時代に対応した教員研修プログラムを開発することである。グローバル時代とは、多文化共生かつ持続可能な地球環境の実現が求められる時代である。つまり、多文化共生教育と地球環境教育がますます重要視される。すなわち、それらはESD(持続可能な発展のための教育)の一環の中に位置づけられるものであり、それらの教育が目指していることは、国立教育政策研究所が提案している「21世紀型能力」と繋がる人が多い。「21世紀型能力」を視野にいれながら、以下の教員研修プログラムの開発を計画している。

多文化共生教育に向けた参加体験・授業研究型研修プログラム

地球環境教育に向けた参加体験・授業研究型研修プログラム

### 3. 研究の方法

研究の方法として、以下の3段階の方法に従って研究を進めてきた。

#### (1) 教員研修プログラムによって培う資質能力の育成

先行研究と教育職員養成審議会答申の内容を基に、教員の資質能力の基本構造を定義づける。その上で、国際理解教育の基本目標と持続可能な社会の担い手を育てる持続可能性の教育の学習論から、グローバル時代に特に求められる資質能力について考察する。

#### (2) 多文化共生教育教員研修プログラム・地球環境教育教員研修プログラムの開発

これまでの共創型対話学習の研究を基盤として、多文化共生教育教員研修・地球環境教育教員研修についてのアイデアを、研究代表者・研究分担者・研究協力者で集める。集まったアイデアを基に教員研修プログラムとして活用できそうなものへと絞り込む。絞り込んだ内容を研修プログラムとして組み立て、研究代表者・研究分担者・研究協力者で検討し、教員研修プログラムの試案を作成する。試案は、共創型対話学習を基盤として、体験的な活動を取り入れるようにする。それらの試案を研究協力者である小学校・中学校の教員を対象として、試行する。そして、試行に参加してくれた教員の意識変容に関するデータを、質問紙法、インタビュー法によって収集し、それらを基に教員研修プログラムの洗練化を行い、再度同じように2回目の試行をし、それらの結果に基づいて、さらに教員研修プログラムの洗練化を図る。

#### (3) 教員研修プログラムを受けた教員による授業研究

教員研修プログラムの試行に参加してくれた研究協力者が、多文化共生や地球環境に関する授業研究を行うことによって、授業者の意識がどのように変化していったかのデータを、インタビュー法によって集め、考察する。

### 4. 研究成果

#### (1) 教員研修プログラムによって培う資質能力の育成

本研究における教員研修プログラムによって時代を超えた教員の資質能力を培うことは難しいが、グローバル時代に対応した教員研修プログラムの方向性をつかむことができた。それを以下に示す。

## 【教員の資質能力の基本構造】

方法技術を含めた教師の専門性の要素と人間性の要素が不可分一体となった実践的指導力

時代を超えた普遍的な教員の資質能力については省略する。

時代を超えた普遍的な教員の資質能力という土台があり、その土台の上にグローバル時代において特に必要とされる教員の資質能力があると考え。

### 【グローバル時代に特に必要とされる教員の資質能力】

教育事象や日常生活、世界の出来事に対して、先入観や固定観念をもたずにものごとを見ようとし、相対化して多様な見方や柔軟な考え方をもって子どもたちの指導ができること。

激動する多文化社会において、環境に適応しつつ主体的な自立心やたくましい意志力をもって、感性と人のつながりを大切に生きた生き方ができ、それらを子どもたちに指導できること。

異なる考えをもつ同僚とも高みを目指して対話し、共創型対話を活用した学びを子どもたちに指導することができること。

他者の意思や考え方を尊重しつつ自分の志を高くもって生きる姿勢を自らが持ち、それを子どもたちに培いつつ、地球的課題の解決に取り組む意識や行動力を育てる学びを導くことができること。

社会的な礼儀を重視し、ボランティア精神に基づいた行動力を培うことができること。

明確な達成目標設定と参加と体験を通じた協同的な学びのプロセスを、ファシリテーターとして共創型対話を駆使して支援できること。

## (2) 多文化共生教育教員研修プログラム・地球環境教育教員研修プログラムの開発

### ア 教員研修プログラムの基盤としての共創型対話

共創型対話とは、研究分担者である多田孝志の造語であり、新たな対話概念である。それは、多様な人々が英知を出し合い、一人では到達し得なかった高みに至ることを目指した対話である。

多田は共創型対話の基本理念を、「和の精神や相互扶助を基調とする『多様性の容認と尊重』にある」としている。そして、多田は共創型対話の基本的考え方として、次の6点を示した。すなわち、創造的な関係の構築、少数者の意見と異質の尊重、当事者意識・参加者意識、変化への対応力、響感への姿勢、ダイアログ型言語表現力である。

本研究における教員研修プログラムは、共創型対話を基盤として組み立てられている。

### イ 多文化共生教育教員研修プログラム「マレーシア ペナンからの転校生」

マレーシアのペナンから5年生の女子児童が転校してきた場合に、どう対応するかを議論したり、役割演技を行ったりする教員研修プログラムである。女子児童の父はマレーシア科学大学の環境学・開発学の研究者であり、名古屋大学大学院国際開発研究科の交換研究員として、家族といっしょに来日したという設定している。女子児童はマレー人であり、ムスリムである。アイスブレイクとしてのコミュニケーションアクティビティーと共創型対話を行う上での留意点を確認する。そして、マレーシア・ペナンクイズを行い、参加者のマレーシアへの偏見を少しでもぬぐいさることができるようにする。その上で、女子児童を受け入れた教員の立場での対応を議論する。その内容は、ヒジャーブを被ることへの対応、食物禁忌に対する対応、ヒジャーブをからかう男子児童への対応、ラマダーンでの断食への対応である。それぞれの議論の後に教育学者としてアドバイスを入れてある。そして、女子児童役、日本人児童役に分かれて役割演技を行い、それぞれの気持ちを考えあう。役割演技の後は、女子児童がペナンで通っていた小学校に、日本の大学生が訪問した時の思い出話を入れた。その内容は、目白大学人間学部児童教育学科のマレーシア臨地研修での実際の活動の場面である。そして、多文化共生のための学級経営はどうあるべきかの議論を行う。さらに、教員を対象として考えた多文化共生ダイヤモンドランキングを行って締めくくるといふ研修プログラムである。

以下に、研修プログラムの試行後の意識変容の典型例を紹介する

#### A 教諭 (研修の前後)

1. 外国人児童・生徒の転入に関心がありますか。(4段階)  
・とても関心がある。                      ・とても関心がある。
2. 外国人児童・生徒の転入に賛成ですか。(4段階)  
・あまり賛成でない。                      ・賛成だ。
3. 2の理由を書いてください。

##### 【研修前】

今の忙しい学校事情では難しい。

##### 【研修後】

難しく考えていたが、私でもできそうな気がした。

4. 東南アジアに関心がありますか。(4段階)  
・関心がある。                      ・関心がる。
5. マレーシアに対するイメージを書いてください。

##### 【研修前】

敬虔な信者が多い。男尊女卑。

【研修後】

太陽が照り、明るく、人々は誰でも受け入れる国だと思った。

6. イスラームに対するイメージを書いてください。

【研修前】

お祈り。ラマダーン。聖書。

【研修後】

信じるものの1つで、私たちが信じる神様、仏様とかわらない。

7. どのような学級経営がしたいですか。

【研修前】

自ら探究する児童が育つ学級。協働する学級。

【研修後】

異文化を受け入れる体制のある学級。インクルーシブな学級。

**B 教諭** (研修の前後)

1. 外国人児童・生徒の転入に関心がありますか。(4段階)

・とても関心がある。 ・とても関心がある。

2. 外国人児童・生徒の転入に賛成ですか。(4段階)

・賛成だ。 ・賛成だ。

3. 2の理由を書いてください。

【研修前】

外国人児童に合わす必要がある。他の児童には学びの機会になる。

【研修後】

多くの諸問題がある。他の児童にとっては、とってもよい経験だ。

4. 東南アジアに関心がありますか。(4段階)

・関心がある。 ・とても関心がある。

5. マレーシアに対するイメージを書いてください。

【研修前】

物価が安い。宗教によるしほりが多い。多文化社会。

【研修後】

とても寛容で温かい国。日本のように排他的でない。

6. イスラームに対するイメージを書いてください。

【研修前】

食事や礼拝など宗教上の規制が多い。信念が強い。

【研修後】

自分たちの信念を大切に、生きることを大切にしている。

7. どのような学級経営がしたいですか。

【研修前】

一人一人が責任をもって行動する学級。周りを見て行動する児童。

【研修後】

一人一人、他者を大切にする学級。共存を重視したい。

A 教諭、B 教諭は2名とも、研究協力団体である名古屋市の国際理解教育同好会の会員である。そのため、2名とも外国人の転入生に対して比較的に前向きな姿勢を示している。だが、マレーシアなどの東南アジアの国々やイスラームに対して詳細な情報を持っているわけではない。そのため、解決すべき具体的な問題点が見えてくることによって困難性も感じるようになってきている。だが、それぞれに異なる文化を持つ児童を含めた学級経営を志向するようになってきている。今後は、国際理解教育や多文化教育にあまり関心のない教員を対象とした教員研修プログラムの効果を検証したい。教員志望の大学生を対象とした調査では、その学生が東南アジアやイスラームに対してどれだけの知識を持ち理解しているかによって、その反応がかなり異なるということは分かってきた。

ウ 地球環境教育教員研修プログラム「海ごみ」

海洋汚染は日々深刻さを増している。海岸にはさまざまな漂着物が流れ着いている。この教員研修プログラムでは、海岸への漂着物カードを用意して、それらを分類する。そうすると、生物系と人工物系の大きく2つに分けられることが分かる。さらに、人工物系は、国内のものと海外の物とに2つに分類できることが分かる。参加者が分類した後での解説では、海岸に漂着した実物も見せながら解説を入れるようにした。そして、海ごみの回収量、海ごみの発生源、ペットボトルの国別漂着量、マイクロプラスチックの海ごみ量、海ごみの生態系への影響についてクイズと解説によって、その深刻さを理解できるようにする。そして、5人から6人の教員のグループで、地球環境問題を取り上げた授業づくりのアイデアを練り上げる。そのために7段階の例を研修参加者に示し、その内容を話し合っ決めて。その段階の例とは、次のようなものである。課題の設定：気象予報士の話を聞き、地球温暖化に関心をもつ、情報の収集1：環境博物館やインターネット・書籍を活用して地球温暖化について調べる、情報の収集2：気象予報士に質問をし、地球温暖化防止のために活動するNGO職員に質問をして疑問を解決する、情報の収集3：地球温暖化防止のための海外の取り組みについても調べる、情報の整理：調べて分かったことや地球温暖化を防ぐための自分たちの方策をまとめる、発

信と行動 1 : 地球温暖化を防ぐための自分たちの主張を全校朝会で発表する、 発信と行動 2 : 地球温暖化を防ぐため学校で省エネ活動に取り組むための 7 段階である。参加してくれた教員は話し合い、カラーケント紙に自分たちが計画した内容を書き込んでいった。さらに、研究協力者である石田好広が校長を務めた東京都の小学校での海ごみ実践などを紹介してプログラムは終わっている。

東京都のある小学校の 19 人の教員を対象とした校内研修において教員研修プログラム「海ごみ」を実施した。その結果は以下のようなものであった。海ごみにとても興味があった 21%、興味があった 31%、あまり興味がなかった 48%が、とても関心を持った 79%、関心をもった 21%に変化している。授業実践をしようと思ったかについては、とてもそう思う 21%、そう思う 79%という回答があった。生活を見直そうと思ったかについては、とてもそう思う 59%、そう思う 41%という回答があった。自分で活動しようと思ったかについては、とてもそう思った 31%、そう思った 69%という回答であった。

これらの結果は、具体的な資料によって海ごみの問題の深刻さが理解されたこと、海ごみの問題が自分たちの身近な生活と結びついていること、授業方法の段階の例が示されたことなどの要因により、参加者の意識変容がもたらされたと考えた。

### (3) 教員研修プログラムを受けた教員による授業研究

研究協力者である小学校・中学校教員が、それぞれが取り組める範囲で授業研究に取り組んでくれた。2 例紹介する。

#### ○ 外国人児童の転入に対する指導（小学校）

4 年生の学級に外国人の子どもが転校してきたことを題材とした総合的な学習の時間の指導を行った。外国人児童の受け入れへの意識が高まったと報告があった。授業者の意識は、外国人児童受け入れの方に向いているのだが、それは多文化共生教育教員研修プログラム受講によって、心構えができていたためと考える。

#### ○ 地域の川に注目した環境教育指導（小学校）

汚濁した地域の川を継続的に観察し、その状況を改善するための方法を話し合い、未来の地域の川に想いをよせ、それを発信する 4 年生の総合的な活動の時間の指導である。地域の環境を改善しようとする意識や地域への愛着が高まったと報告があった。授業者の意識は、地域の環境改善に向いているが、それは地球環境教育研修プログラム受講によって、環境改善への意識が高まったためと考える。

## 5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 14 件)

和井田清司「小さな村の教育改革 - g7 の取組に着目して」、武威大学『教職課程研究年報』第 33 号、pp.5-12、査読無、2019 年

多田孝志「グローバル時代の対話における「間」の重要」、『グローバル時代を共に生きる子どもを育てる教育実践の推進』第 1 号、pp.35-45、査読無、2019 年

成田喜一郎「グローバル時代の「教師教育/Educator Education」を問い直し/見通す」、『グローバル時代を共に生きる子どもを育てる教育実践の推進』第 1 号、pp.45-55、査読無、2019 年

和井田清司「環境（公害）教育と国際理解教育の典型実践に学ぶ」、『グローバル時代を共に生きる子どもを育てる教育実践の推進』第 1 号、pp.56-65、査読無、2019 年

石田好広「海ごみを題材にした研修プログラムの開発」、『グローバル時代を共に生きる子どもを育てる教育実践の推進』第 1 号、pp.22-34、査読無、2019 年

島本洋介「ESD における動物介在教育の意義」、『グローバル時代を共に生きる子どもを育てる教育実践の推進』第 1 号、pp.82-88、査読無、2019 年

成田喜一郎「カリキュラムデザインのための『曼荼羅』シートの開発と実践：『e-カリキュラムデザイン曼荼羅』への道」、『東京学芸大学教職大学院年報』第 6 号、pp.1-12、査読無、2018 年

中山博夫「グローバル時代の大学における道德教育」、『人と教育』第 12 号、pp75-79、査読無、2018 年

中山博夫「グローバル時代における道德教育における一考察」、『目白大学人文学研究』第 14 号、pp.27-41、査読有、2018 年

中山博夫「グローバル時代に対応した教師の資質能力に関する一考察」、『目白大学人文学研究』第 13 号、pp.27-41、査読有、2017 年

成田喜一郎「オートエスノグラフィー『ライフヒストリーの中の環境教育』：『史的環境教育学』への誘い」、『環境教育学研究』第 26 号、pp.159-180、査読有、2017 年

中山博夫「共創型対話を活用した特別活動の指導」、『未来を拓く教育実践学研究』第 2 号、pp.61-72、査読有、2017 年

多田孝志「深い思考の考察」、『未来を拓く教育実践学研究』第 2 号、pp.1-21、査読有、2017 年

和井田清司「国際協力と地域づくりー「リアルな教材」が生徒変えるー」、『学校教育研究』第 31 号、pp.47-59、査読有、2016 年

[学会発表](計 5 件)

中山博夫・石田好広「グローバル時代に対応した教員研修プログラムの開発」、日本学校教育学会第 33 回研究大会、2018 年

多田孝志「教育の質の向上と ESD」、日本 ESD 学会（招待講演）、2017 年

中山博夫・石田好広「グローバル時代に対応した教員研修プログラムの開発」、日本学校教育学会第 32 回研究大会、2017 年

多田孝志「環境教育が切り拓く持続可能な社会づくりとアクティブラーニング」、日本環境教育学会第 27 回大会（招待講演）、2016 年

中山博夫・石田好広「グローバル時代に対応した教員研修プログラムの開発」、日本学校教育学会第 31 回研究大会、2016 年

〔図書〕(計 2 件)

多田孝志『グローバル時代の対話型授業の研究 実践のための 12 の要件』、東信堂、2017 年

多田孝志・和井田清司・佐々木幸寿『教育の今とこれからを読み解く 57 の視点』、教育出版、2016 年

## 6 . 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：多田 孝志

ローマ字氏名：TADA Takashi

所属研究機関名：金沢学院大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8 桁）：50341920

研究分担者氏名：和井田 清司

ローマ字氏名：WAIDA Seiji

所属研究機関名：武蔵大学

部局名：人文学部

職名：教授

研究者番号（8 桁）：50345542

研究分担者氏名：成田 喜一郎

ローマ字氏名：NARITA Kiichiro

所属研究機関名：東京学芸大学

部局名：教職大学院

職名：研究員

研究者番号（8 桁）：80456251

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：石田 好広

ローマ字氏名：ISHIDA Yoshihiro

研究協力者氏名：小林 恭子

ローマ字氏名：KOBAYASHI Kyoko

研究協力者氏名：島本 洋介

ローマ字氏名：SHIMAMOTO Yosuke

研究協力者氏名：多田 亮介

ローマ字氏名：TADA Ryosuke

研究協力者氏名：原田 信三

ローマ字氏名：HRADA Shinzo

研究協力者氏名：須原 直子

ローマ字氏名：SUHARA Naoko

研究協力者氏名：長谷川 慶

ローマ字氏名：HASEGAWA Kei

研究協力者氏名：山田 修

ローマ字氏名：YAMADA Osamu